荊 希文

JING Xiwen

星の降りる森

紙本着彩

星の降りる森

本作品《星の降りる森》では、現実の情景を具象と抽象を織り交ぜて描写し、幻想的で風変わりな世界観の表現を目指した。クリスマスの夢のような世界にはたくさんのものが配置されている。おもちゃ、星、幼い頃を象徴するものたち、そしてツリーに絡まるライトは、子どもたちの視線を惹きつけ、画面の奥へと誘う。一方で、ツリーに絡まるライトは街灯のように輝いたり、山に絡みつく道路のように見えたりする。画面は、いつしか私たちが住んでいる街並みのように目に映り込む。
いくつもの家の窓からもれる暖かい光と冷たい月光がツリーの上で互いに照り映えている。月の光で全てのものが耀き、まさに異世界の幻を見ているような気分を味わうことができるだろう。ツリーの中央に飾られた人形は、自分の子供時代を思い出させる。私は、夜にバイオリンを演奏したくなるような気持ちでこの絵を描いた。《星の降りる森》は、全く音のない世界ではなく、穏やかな心に心地よい音が響いている世界だ。静寂な夜に月の光を強く意識すると、微かな緊張感が冷たい空気とともに私の目から入り込む。このような緊張感は、生命の誕生を想像させる植物と楽しかった記憶を想像させる人形により和らぐ。
私は、この作品を、人々の繁雑な生活からのんびりと過ごせる世界へと通じる窓のように捉えている。変化の早い現代社会において、人々はいつも何かに追われている。だから穏やかな雰囲気を感じながら、にぎやかな生活の音が遠い余韻のように響いている世界を描きたいと思った。私は、常に身近にある豊かな自然に瞳を凝らし、太陽による光の変化から生み出される情景から着想をもらい、自分の表現に置き換えて制作している。また、作品を通して自然のなかに生まれるリズムや造形を画面に記録し、自然の色調を再現することで心の安らぎや平穏、ゆっくりした時間を伝えたい。日本画の材料や技法は自分にとって魅力的であり、岩絵具のもつ独特の色を活かしながら、人の心に訴える情景を描き続けたい。